

どっちつかズ

石原 三日月

この古民家に移り住むことになったのは、僕のへどっちつかずのせいだった。だが弁解させてほしい。決して僕が望んだことではない。

自慢に聞こえるかもしれないが、どうやら僕は人々を揉めさせてしまわらしい。皆、僕に選ばれようとして争うのだ。理由はわからないし、僕が望んだことでもない。

物心ついた時の記憶では、すでに幼稚園の砂場で二人の女の子が争っていた。「どっちと遊ぶの？」と迫られて困り、「どっちとも遊ばない」と答えた。二人は号泣して、僕は園長に叱られた。

小学校に上がると、席替えの度に女子たちが「隣になりたい」と揉めた。放課後には誰と遊ぶかで男子たちが揉めた。毎年、遠足のグループをつくる時期になると、僕を巡って学級崩壊が起きた。親から何度も「どっちつかずは止めなさい」と諭された。

それでも中学までは何とかやり過ごしたが、高校になると洒落にならなくなった。

気づけば、目の前で制服姿の女子と女子が取っ組み合い、「どっちを選ぶの？」と鬼気迫る顔で僕を見つめている。そこへ通りすがりの男子が「こいつのことは諦める。親友の俺が言うのだから間違いない」と割って入ると、また別の男子が「いや親友は俺だけ」と乱入する。そして最後には全員が「どっちか選べ！」と僕に叫ぶのだった。

大学でも同じ状況が続いた。その頃には僕も感覚が麻痺してしまい、目の前で繰り広げられる乱闘も見馴れてしまった。さらに社会人になると「まあ死人が出なきゃいいや」という境地に達していた。

しかし、とうとう先月、同僚の二人が刃物を手にして争う事態になってしまった。

幸い大事には至らなかったが、さすがに僕もショックが大きかった。

いっそ独りでひっそりと暮らしたい。誰もいないところで……

そんな時だった。とある町のサイトで「移住者募集」という記事を目にしたのは。

都心から電車で片道二時間弱。里山という言葉が似合うその小さな町は、過疎化と高齢化を食い止めるため、都心に通勤する若い移住者を募集していた。

提供されるのは築百年を超える古民家。若者でも暮らしやすいよう、オール電化住居にリノベーションされている。

それだけなら珍しくないが、さらに家じゅうの電化製品を一括管理するA+アシスタントが装備されていて、すべて自動で家事をこなしてくれると言う。

それを動画で説明していたのは、この家の付属品である自律移動型のスマートスピーカーだった。直立したアザラシみたいな可愛らしいフォルム、大きさは小学生くらいか。スムーズに動き回り、明るい声でリズムカルに語っている。

「最先端技術と、古き良きものの、共存を、目指します」

言葉通り、古民家らしい外見や内装はそのままだった。屋内にも年代ものの古い道具や置き物が置かれたままだ。掛け軸、階段箆筥、壺や土瓶、それに床の間には大きな鎧兜まで鎮座している。

「名づけて、温故知新型スマート古民家、です」

僕の心は揺れた。

片道二時間の通勤はきついのが、代わりに家事をする時間は必要ない。なにより住民が少ないのは魅力的だ。引き籠っていれば出会いもないだろう。ここなら僕を巡って揉める人もいないはず……

それに「温故知新型」なんて聞こえはいいが、要は古いものと新しいものへどっちつかずじゃないか。僕にぴったりだ。

そして今日、僕はこの古民家に引っ越して来たのだった。

——それなのに。

いま僕は三和土の土間に立ち、バジヤマ姿のまま、目の前の乱闘騒ぎをぼんやりと眺めている。ある意味では、馴染みの光景だった。

双方とも睨み合い、がっぷり四つに組んで譲らない。

いつものことだ。気づけば目の前にはいつもこの光景があった。

ただし、今夜はその二者が——直立したアザラシみたいなスマートスピーカーと、床の間に鎮座しているはずの大きな鎧兜だった。

周りでは応援団のような歓声が湧いていた。古道具たちがカタカタ動きながら奇声を発し、電化製品たちは表示パネルを激しく明滅させて甲高い電子音を鳴らしている。

「なんだこれ……」

僕の呟きが聞こえたのか、スマートスピーカーの丸顔に青い光が流れた。

「コレ、とは、何、ですか？」

明るくりズミカルな声で答える。鎧兜に体当たりしながら。

「こいつらは何だ、なんで道具が動いている!？」

「ツクモガミ、です」

「付喪神？」

鎧兜が振り返ると、重々しく頷いた。

「ワタシと、ツクモガミは、この家の、覇権を巡り、争っています。新しい、ご主人様は、どちらを選びます、か？」

目眩がして土間に座り込んだ。

——どうとう僕は、無機物を揉めさせるところまで来てしまったらしい。

翌日、町役場を訪ねた。

一晩悩んで出した結論は、Aーアシスタントの完全停止と、古道具の処分の両方だった。結局、僕はどちらにも選べない。

「あの古民家ですが、ちょっと困ったことがありますて」
遠回しに切り出した。さすがにいきなり「付喪神が」とは言えない。

「と、仰いますと？」

「夜中に奇妙なことが起こるのです」

担当者の顔色が、サッと変わった。

「やはりそうですか。前の居住者も同じことを仰っていました」

「前の？ 僕の前に住んでいた人がいるのですか？」

初耳だった。リノベーション後の最初の住人は、てっきり僕だと思っていた。

「はい、つい先日まで。その方からは『Aーアシスタントを完全停止して、古道具も片付けてほしい』と言われました。ですが、こちらが対処を検討している間に出て行かれてしまって……今は裏山のキャンプ場でテント生活をされています」

話に乗れずと、別の職員が割り込んで来た。二人が僕の担当を巡って揉め始めたので、隙を見て立ち去る。その足でキャンプ場へ向かった。

テントはすぐに見つかった。

ぼんやりと焚火を眺めていたのは、若い女性だった。

彼女から話を聞いた僕は、驚愕した。

その人はこう語り出した——どうやら私は相手を揉めさせてしまうようです、と。

幼い時から人々を揉めさせて来た。皆、自分に選ばれようとして争う。とうとう先日、知り合い同士が大怪我をしたため、この町へ移り住むことを決心した——すべてが僕とまったく同じだった。

「とうとう私は無機物を揉めさせるころまで来てしまったかと、ショックであの古民家から逃げ出してしまったのです」

理由なく留守を続けた場合、自動的に解約になってしまう。役場に「Aーと付喪神が自分を取り合っているから」という本当の理由は言えず、彼女は家主の資格を失ったのだ。

それから僕が自分のことを語った。彼女は目を丸くして聞いていたが、話が終わる頃には、お互い初めて出会えた理解者に深い共感と信頼を抱いていた。

すでに陽は暮れていた。夜空には星が瞬いている。すっかり話し込んでしまった。

もう帰らなければ。だが……

「帰るのが憂鬱です」

つい弱音を吐いてしまった。彼女は僕を見つめると、

「ご迷惑でなければ、私も一緒にしましょうか？」
おずおずと言った。

「他人事とは思えないですし、それにもう一度、あの古民家を見ておきたかったので」

「それなら、ぜひ」

僕は腰を浮かせたが、ふと彼女は眉根を寄せた。

「ただ、私が戻ったらどうなるのかと」

「それはやはり——」

揉めるでしょうね、と言いかけて、僕はハッとした。

待て、こんなのは人生で初めてじゃないか。何が起こるのだろう。好奇心が湧いた。

二人の(へどっちつかず)——複数だから(へどっちつかず)か。

思わず吹き出した僕を、彼女が不思議そうに見つめる。

「僕とあなたが揃ったら、どれだけ盛大に揉めるんでしょうかね？」

それはまさに狂喜乱舞だった。

鎧兜は彼女の手をとって盆踊りのように舞い、スマートスピーカーは「お帰りなさいませ」と叫びながら回り続けている。古道具たちは跳ねまわり、電化製品たちは電子音でファンファーレを奏でて、前家主の帰還を盛大に祝った。

彼女は気恥ずかしそうに踊りながら、晴れやかな笑顔を浮かべていた。その様子を僕は幸せな気分で眺めている。

付喪神はともかくとして、Aーが彼女をまだ家主と認識したのは意外だった。

スマートスピーカーに尋ねると、快活に一言、「バグです！」と答えた。

「ワタシの、ご主人様は、お二人、両方です」

もしかしたら、この不思議なバグは僕たち二人が揃ったせいじゃないだろうか。

やはり、すごいことが起きる予感がする。ここからどんな展開が待っているのか。

いつ揉め出すのだろう？

どういう風に僕たちを取り合うのだろうか？

乱闘の激しさは？

なぜか高揚した気分を感じながら、お祭り騒ぎを眺め続けた。

だが、どれだけ待っても揉め事が起こらない。

こんなことは初めてだなと、独りでぼんやり思った。

——独りで？

そう言えば、僕はずっと独りで放っておかれていた。彼女はまた賑やかな輪の中心にいると言っただけなのに。

「もうそろそろ、お開きにしませんか」

割り込むようにして、話しかける。

「もう休みましょう。朝になったらテントまで送りますから」

「私、この古民家に戻りたくなくなっちゃいました」

振り向いた彼女は、上気した顔で言った。

「私に家主を譲ってください」

「は？」

その途端、ワァッと歓声が上がった。Aーと付喪神の両方からだ。

なんだこいつら、彼女の味方になったのか。

「そんなの無理ですよ」

「どうして？」

「今の家主は僕なんだから」

ワアッと、さっきより大きな歓声がかかる。良かった、僕の味方だ。

「でも私、無理やり解約させられたんです。やっぱりここに住みたいです」

また歓声が上がった。

「僕も一大決心して来たんです。住むのは僕です」

さらに歓声。

「いえ、私です！」

歓声。

「僕です！」

歓声に歓声が重なっていく。

こいつらは一体、どちらの肩を持つつもりなのか。

「私！」歓声「僕！」歓声、歓声歓声歓声……

気づけば、僕と彼女はやつらに向かって叫んでいた。

「どっちか選んで！」

なるほど、やっぱりへどっちつかずへは、独りのままがいいらしい。